

喜州鎮は大理古城から洱海沿いに北に約 18km 位のところにある小さな白族の町である。大理市喜州鎮と呼ばれているから行政区画上は大理市に入っている。南詔国時代の軍事拠点の一つとして栄えた後もこの地域の商業の中心地として繁栄した所である。ガイドの話ではここが茶馬古道の出発点と言われているらしい。集荷場だったのだろう。雲南省南部各地から茶葉が一旦ここに集まり、ここから西藏への運搬が始まる。そんな場所らしい。

廠家大院と三道茶

この町には白族の伝統的な民居が多く残されているようだ。その中でも豪族の屋敷と言われている「廠家大院」は規模の大きさと優美さで群を抜いている。



屋敷へ入る門は白壁の坊に挟まれた路地の奥にあった。左の写真の右側にあたる。

門は右の二枚の写真の様に豪華絢爛な造りになっている。木彫や細かい組木に瑠璃色の瓦と飾り絵、豊富に使われた大理石といい一流の造りである。余程の素封家であったのだろう。

右下の写真にあるように門の両側に魔除けの獅子があるのを見つけた。沖縄のシーサ、それに日本の神社にある狛犬も実は獅子の形象化したものと言われている。獅子を魔除けや守り神としていることに稲作文化の共通した流れがあるのかもしれない。

白族の民居は三房一照壁が基本で他に漢族の四合院形式のものも在ると言われているが、この廠家の民居はそれらが複合した、すこぶる大きな邸宅になっていた。屋敷の中には劇場まである。参考までに坊というのは三つの入り口を備えた二階建ての建物を指すのだそうである。

次ページの左が房、右が照壁である。三方の房に囲まれた庭は石畳になっていて、土の部分はない。



庭には鉢に樹や花が植えられていて絵が描かれた照壁がその背景になっていた。



中庭の片隅に民族服を着た少年少女が座って雑談していた。屋敷内の劇場で白族の歌と踊りを見せている踊り子達だ。

この「巖家民居」はこの地域の観光の目玉らしい。開演時間になると観光バスが停まり団体客が入場してくる。演目は田園の暮らしと楽しみ、そして若い男女の出会いから結婚までを歌と踊りで表現しているものだ。ショーは30分くらいの短いものだが情景でほぼストーリーは把握出来るし、華やかな民族衣装はのどかな田園生活の娯楽を想いおこさせる。ショーの間には白族の飲茶の風習である「三道茶」も体験できる。写真右上はショーのラストの結婚式の場面。中央の赤い服が花嫁で白族女性の帽子を被せられたのが新郎の設定だ。左の民族衣装の二人は三道茶を給仕してくれた女性たちである。

「三道茶」は三回に分けて飲む飲茶の作法で一番目は苦く濃いお茶で香りを楽しみ、二番目は甘いお茶、三番目は辛い後味が残るお茶になっている。

後日調べてみたら、甘いお茶には胡桃、乳扇（チーズ）、赤砂糖が混ぜられている。三番目には山椒、生姜、肉桂の皮が加えられていて、辛さとしびれが残る。白族の言葉で辛いと親しい、しびれると裕福が同発音らしい。



左の写真が正門である。これも大きくて豪勢な造りになっている。観光客が多いようで、壁には邸内の見所が写真入で説明されていた。

この屋敷は5200㎡の敷地に3800㎡の建屋とばかりでかい。壁に囲まれた敷地内に上の二枚の写真のように色んな建物と庭がある。周りの住居を見てもこれほどの大きさの邸宅は見当たらない。



~~~~~  
< 茶馬古道の話 >

チベットに茶が初めてもたらせたのは641年、唐の皇女文成公主がチベット吐蕃のソンツェン・ガンボ王に嫁いだ時と言われている。その後、遊牧民の体を暖めるのにヤクのバターと塩を入れて飲むことが広まったと言われている。確かにチベットの寺院で、遊牧民のゲルで大きな容器で沸かしたバター茶を飲んでいる映像を良く見掛けている。

茶の栽培は雲南省、四川省の湿潤な高地で始められた。亜熱帯性常緑樹チャノキの若葉を摘んで酸化発酵させずに乾燥したのが「緑茶」である。大きい葉、小枝、茎を蒸しては乾燥させる工程を何度か繰り返し、米を煮たところみと水を混ぜて押し固めて乾燥させたのが「磚茶(たんちゃ)」で、500gから3kgの塊になっている。

前述のナショナル・ジオグラフィックには四川省の事例しか記載されていないが、それによると四川省西部の「雅安」周辺の農園、工場から人力で集積地の「康定」に運ばれる。一人が80kgから100kgの荷物を背負い2500mの高地を20日間かけての旅になる。そして「康定」で、ヤク皮に厳重に包装されてラバやヤクの背で三ヶ月かけて5000m超の雪山の峠を越えて「ラサ」に運ばれる。砂漠を越える北のシルクロードも過酷だが、雪山を越える南の茶馬古道も劣らず過酷な道であった。「喜州」も雲南省側での集積地で「康定」の役割であったのだろう。蔵家はその元締めだったのかもしれない。

茶馬古道は唐の時代に始まる。13世紀には年間数千トンの茶がチベットに運ばれ25,000頭の馬が購入されたという記録がある。宋の時代、北方の元との戦で軍馬の需要が多かった。チベットの名馬ナンチェン(ナンチン)は体高1.4mと小柄だが高地に適した大きな肺を持ち、酸素の薄い4500mのチベット高原でも疲れを知らず、雪道でも安定していてスピードとスタミナに優れているという。茶と馬の交易なので、茶馬古道と呼ばれている。交換レートは磚茶60kgに馬一頭と四川茶馬司が決めた記録が残されている。

明の時代も清の時代も茶と馬の交易は続き、18世紀馬の需要が減ると毛皮、羊毛、金銀、冬虫夏草等の薬草に主役が変わったが20世紀まで使われていた。

そして茶の文化はチベットから南のインドに渡り、ヨーロッパにも伝播されていった。

~~~~~